

「映画を観たい」思いはみんなのもの

平塚千穂子

映画を観たいのに、映画を観ることがままならない人たちがいることを知っていますか？

目の見えない人、耳の聴こえない人、車椅子の人、小さな子どもを連れた人、大勢、人のいる場所、じっとしていられない人々など……。映画は誰も排除していないのに、その映画を映画館で観ることがままならない人たちが存在します。それは、これまで観客の対象を健常者しかイメージしてこなかったからにすぎませんが、それが、当たり前になってしまっていると、その外側にいる人たちと、接する機会がない限り、なかなかその存在に気づくことができません。大衆娯楽であり、

文化でもある映画は、みんなのものであってほしい。誰も排除することのないものであってほしい。そんな願いから、この活動は始まりました。

私が、目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりに取り組むボランティア団体 City Lights を設立したのは、二〇〇一年四月のことです。その一年ほど前に、無声映画のチャップリンの「街の灯」の感動を、視覚障害者にも伝えたいという無謀な企画に参加したのがきっかけでした。当時の私は、目の見えない人に見て楽しむ映画の話をするには、タブーなのでは？ と思っていました。しかし、実際、当事者

たちに聞いてみると、思いの外、見えない方々が「映画を観たい」と思っていることを知り、驚いたと共にカルチャーショックを受けたのが大きなきっかけとなりました。

それまで私は、ボランティアとは無縁でしたが、映画館で働いていたおり、素晴らしい映画を何本も観ることのできる環境にありました。だから「映画を観たい」と思っているにも関わらず、目が見えないというだけで、映画を味わうことができない視覚障害者の人たちがいることを知って、何とかならないだろうか？ と思ったのです。そして、いろいろ調べてみたところ、アメリカでは一〇〇館以上の映画館に、視覚障害者が場面解説（音声ガイド）を聴くためのヘッドフォン設備があり、公開と同時に最新映画を鑑賞しているという事実を知りました。それなのに、日本では、そのような映画館は全くなかったのです。そこで私は思いました。「ないなら自分たちで創るしかない」と。しかし、見せることに重きをおいて作られている映画を、目の見えない人に、言葉で説明すると

いうのは、そう生半可なことではありません。最初は、視覚障害者に映画の場面情報を伝えるための、「音声ガイド」の研究から始めました。「音声ガイド」とは、セリフの合間や場面転換の隙間に挿入する場面説明のことで、時や場所、人物の服装や動き、表情、情景描写などを説明する、テレビドラマの副音声に似たものです。

「音声ガイド」は、映画を何度も繰り返しみて、「この動きをどう説明しようか」「この形をどう表現しようか？」と推敲しながら作っていきます。ですから、「音声ガイド」を作るためには、まず、作る人がその映画をよく理解しなくてはなりません。映画をよく理解するためには、演出の意図、構図の意図、役者の芝居まで、シナリオなどの資料を参考にしたりして、深く、分析しながら観るようになります。すると、ただ漠然と観ていたのではわからなかったようなことに気づきます。それに、言葉の知識も広がり、大変勉強になります。「音声ガイド」は、視覚障害者の方々とも意見交換しながら作るのですが、書いてわかる言葉と聴



出しました。

映画館をつくるなんて一生に一度のこと。長年

いてわかる言葉の違いや、人が言葉から想像するものの違いについて、深く考えさせられます。しかし、視覚障害者の方の音を聴いて想像する世界の奥深さにすっかりハマってしまいました。

そして、活動を始めて一五年目の二〇一六年。障害の有無に関わらず、誰もがあたりまえに安心して映画を楽しむことができ、映画を通じて「こころの交流」ができる。そんな映画館のモデルとなるような、ユニバーサルシアターを創る！という、大きな挑戦に踏み

活動を続けてきた、視覚障害者のための音声ガイドだけでなく、聴覚に障害のある方には、日本映画にも字幕をつける。小さなお子様をお連れの方や発達障害のお子様にも安心して映画を鑑賞できる完全防音の親子鑑賞室や、スクリーンが見やすい位置に椅子スペースを設置するなど、多様なお客様が安心してくつろげるアットホームな映画館にしたいという想いに、五三一名の方が賛同してくださり、一八〇〇万円の設立資金が集まって、日本初のユニバーサルシアター「シネマ・チユキ・タバタ」は、皆様に創っていただきました。

おかげさまで、開館から六年の月日が経ち、障害のある方のみならず、お子様からお年寄りまで一般のお客様にも、映画をお楽しみいただいています。舞台挨拶におこしいただいた映画監督や出演者の方々にも応援していただき、映画の作り手と観客をつなぐ、劇場の大切な役割を果たしながら、実に様々な人々と交流をしてきました。お友だちになった視覚障害者の方と、映画の話をした、もつといい映画を紹介したい。共有したいの

にできないというもどかしさを感じ、どうしたらできるだろうか？と考えて、こうしたらどうだろうか？ということをやってみる。少しでもできるはわった時の喜びを肌で味わうと、もつとできるはず、こんな風にしたら楽しめるのでは？と、できた時の喜びがどんどんアップデートしていった感じで、これまで歩んできました。当事者からも、ここが不便だということ、ここがこんな風になっていたらいいということを、いろいろ教えてもらいました。例えば、上映の入れ替えの時間を長めにとったり、駅までお迎えに行くサポートを行ったり、見えない人が触ってわかるようにポイントカードに切り込みをいれたり。また、映画の音声ガイドだけでなく、劇場までくるのに必要なプロセスの中にも、いろんなバリアが見つかり、できることは工夫し、変えていくことをしていったように思います

つくづく思うのは、「障害」というのは本人にあるのではなく、その人を受け入れる環境や社会の方であって、その人への配慮が不十分だから、「障害者」という存在が生まれるのだと思います。



もし、社会側の環境や設備、ツールが整っていても「障害」を感じないような場所だったら、「障害者」という概念や存在すらないはずで、シネマ、

2022年度 第43回 人権・同和問題企業啓発講座(オンライン講座)

■日時 第1部 2022年9月30日(金)10時~10月31日(月)17時
 第2部 2022年11月1日(火)10時~11月30日(水)17時
 動画配信 期間中はいつでも視聴いただけます。
 (動画共有サイトVimeo配信)

■受講料 第1部・第2部 併せて 8,000円
 第1部・第2部 いずれかの場合 4,000円
 ■主催 人権・同和問題企業啓発講座実行委員会

内 容

◎第1部と第2部 各4講座 計8講座 (各講座70分程度)

■第1部

「職場のハラスメントをなくすために~何ができるか、何をすべきか~」
 今津 幸子 (アンダーソン・毛利・友常法律事務所外国法共同事業パートナー弁護士)
 「就職差別NO!~雇用平等への歩み~」 奥田 均 (近畿大学名誉教授)
 「性的マイノリティの人権」 五十嵐 ゆり (LGBT法連合会理事)
 「移住労働者の人権と企業の役割」 丹野 清人 (東京都立大学教授)

■第2部

「ビジネスと人権~事業・業務と人権のつながりを考える~」
 菅原 絵美 (大阪経済法科大学教授)
 「IT革命の進化と新たな人権課題~ネット上の部落差別と人権侵害の現状をふまえて~」
 北口 末広 (近畿大学教授)
 「精神疾患と共に生きる暮らしの『生きづらさ』から考える」
 山本 深雪 (大阪精神医療人権センター副代表/大阪精神障害者連絡会「はちぼちクラブ」代表)
 「職場の人権・アイウエオ研修」 堀井 悟 (大阪企業人権協議会講師)

■受講申込と支払い方法

- ①クレジット決済またはコンビニ決済 →
 Peatixのウェブサイトでお申し込みください。 <https://43kigyokeihatsu.peatix.com/>
- ②銀行振込 → 部落解放・人権研究所ホームページからお申し込みください。
- 申込締切 第1部 10月25日(火)/第2部 11月25日(金)
- 問 合 人権・同和問題企業啓発講座 実行委員会 事務局
 ◎(一社)部落解放・人権研究所
 TEL06-6581-8596 FAX06-6581-8540
 ◎大阪府商工労働部 雇用推進室労働環境課
 TEL06-6210-9518 FAX06-6360-4751

プロフィール
 平塚千穂子：一九七二年九月一九日東京都生まれ。早稲田大学教育学部教育学科卒業後、飲食店や映画館に勤務。二〇〇一年四月、City Lightsを設立し、映画館「早稲田松竹」を退職。以後、視覚障害者の映画鑑賞環境づくりに従事。二〇〇三年第三七回NHK障害福祉賞 優秀賞受賞。二〇一六年九月、日本初のユニバーサルシアター CINEMA Chupki TABATA 設立。その功績が讃えられ、第二回ヘレンケラー・サリバン賞を受賞。二〇一八年パリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者 内閣府特命担当大臣表彰 優良賞受賞。二〇一九年 読書工房より『夢のユニバーサルシアター』出版。



受付の様子。筆者(左)とスタッフ。

一般の映画館に比べ、鑑賞料金は、一般一五〇〇円、シニア一〇〇〇円、学生一〇〇〇円、中学生以下五〇〇円と、全体的に安めの価格にしています。座席は全席二〇席と、大変小さな劇場です。それなのに、この価格で経営は大丈夫なの？と、よく心配されます。確かにチケット売上だけでは赤字です。だから、設立後もご支援は必要で、皆さまに支えていただいで、やっと成り立つ映画館です。

「チェブキは、「障害」を感じない、感じさせない映画館を目指しています。ですから、料金システムにも「障害者割引」はありません。その代わり、介助者の料金は無料にしています。また、

今年も、新しい映写設備の導入が必要となり、六年ぶりにクラウドファンディングを実施しました。おかげ様で最後には、八三七名の方にご支援をいただき、九四〇万円もの支援額が集まりました。映画ファンの方々なら、映画の感動を味わえないことのつらさ、映画と出会う喜びを知らない悲しみがわかります。夢を心から応援してください。そう思うのがわかります。そういう人たちに、ちよつとした工夫や環境整備で、どんな人も素敵な映画と出会え、感動を分かち合えるんだということを知ってもらい、どんどん支援の輪を広げていきたいと思えます。「チェブキ」はアイヌ語で「自然の光」を意味します。ここに訪れた皆様、ありのままの自然の光に還り、心のつながりを感じられる。小さくても日本一あたたかくて優しい映画館づくりを続けていきたいと思えます。

(ひらつか・まほ) CINEMA Chupki TABATA 代表)